

第5章 考察

1. 弥生中期・濃尾平野の地域区分

(1) はじめに

濃尾平野には弥生前期から条痕紋系土器が分布する。その生産地は確定できていないが中期にも分布は継続するので、濃尾平野において条痕紋系土器は基盤環境である。しかし、今回の調査で須ヶ谷遺跡からまとまって出土した「口縁端部が無紋で上端に刻みを加え、体部に縦位羽状条痕を施す甕」（須ヶ谷形甕）は、これまで分布も散漫で実態がわからなかった形式（フォーム）である。

口縁端部に押し引きや条痕が施され、さらに上端に刻みが加えられる甕はこれまでもいくつかの遺跡から散発的に出土していたのだが、わたしは口縁部という細部に関わる型式変化の1段階として処理してきた。ところが、今回の調査成果はその扱いに問題のあることを明らかにしたので、以下で訂正するとともに、濃尾平野の形式分布についても触れてみたい。

(2) 二枚貝条痕甕の諸形（型）式

弥生前期後半の水神平式の甕は口縁端部にナデか押し引きを施し、体部から口縁部外面まで縦位羽状条痕が施されるものと口縁部外面を横位条痕で仕上げるものがある。壺は口縁端部に押し引きだけでなく条痕を施すものがあるが、甕に条痕を施すものはまだ無い。ただし、口縁端部をナデ仕上げで無紋にするものは檜王式につながり、水

表9 甕の分類と諸遺跡の出土数

	須ヶ谷形	金剛坂形甕a2類	金剛坂系甕	朝日形	野笹形	細見形
門間沼	1	8	0	1	0	2
猫島	3	6	3	3	10	1
八王子	0	3	1	4	3	1
須ヶ谷	11	6	3	8	1	6
朝日V	2	1	0	6	2	9
朝日VI	1	0	1	10	2	6
志賀公園	0	0	3	1	0	4
烏帽子	3	0	0	0	0	12

a 須ヶ谷形：二枚貝・口縁上端刻み
口縁端部圧痕

b 金剛坂形甕a2類：ハケメ→
口縁内面・底部ミガキ

c 金剛坂系甕：ハケメ→底部ミガキ
口縁端部圧痕

d 朝日形：ハケメ→二枚貝→底部ミガキ
口縁端部圧痕

e 野笹形：櫛条痕・口縁上端刻み

f 細見形：二枚貝・口縁端部条痕
口縁端部圧痕

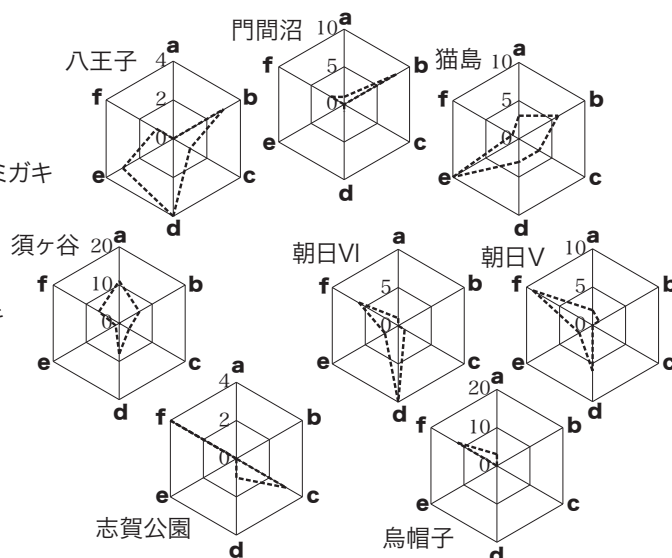


図114 甕の分類と出土傾向

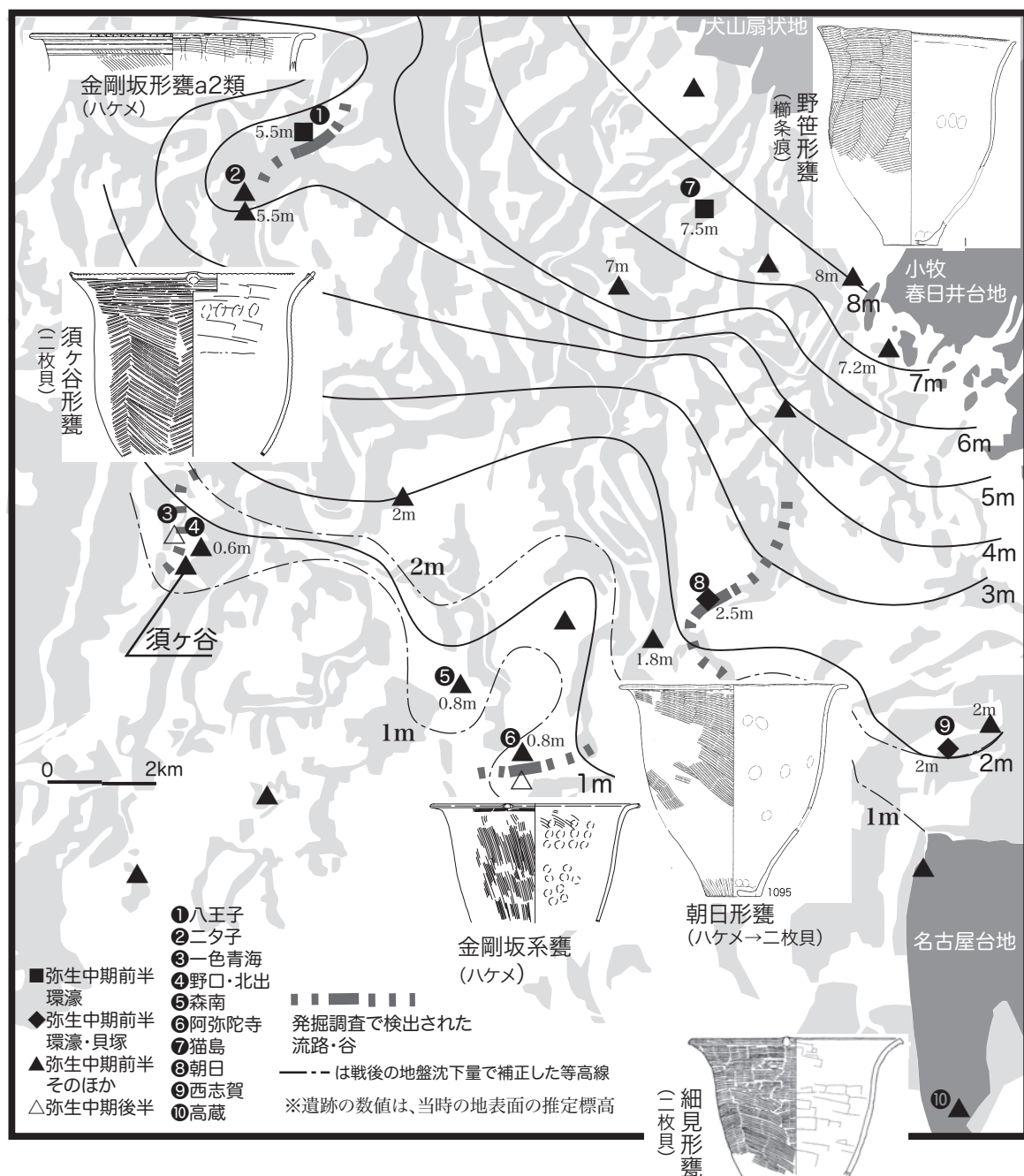


図 115 濃尾平野における弥生中期前葉の甕に見る地域色

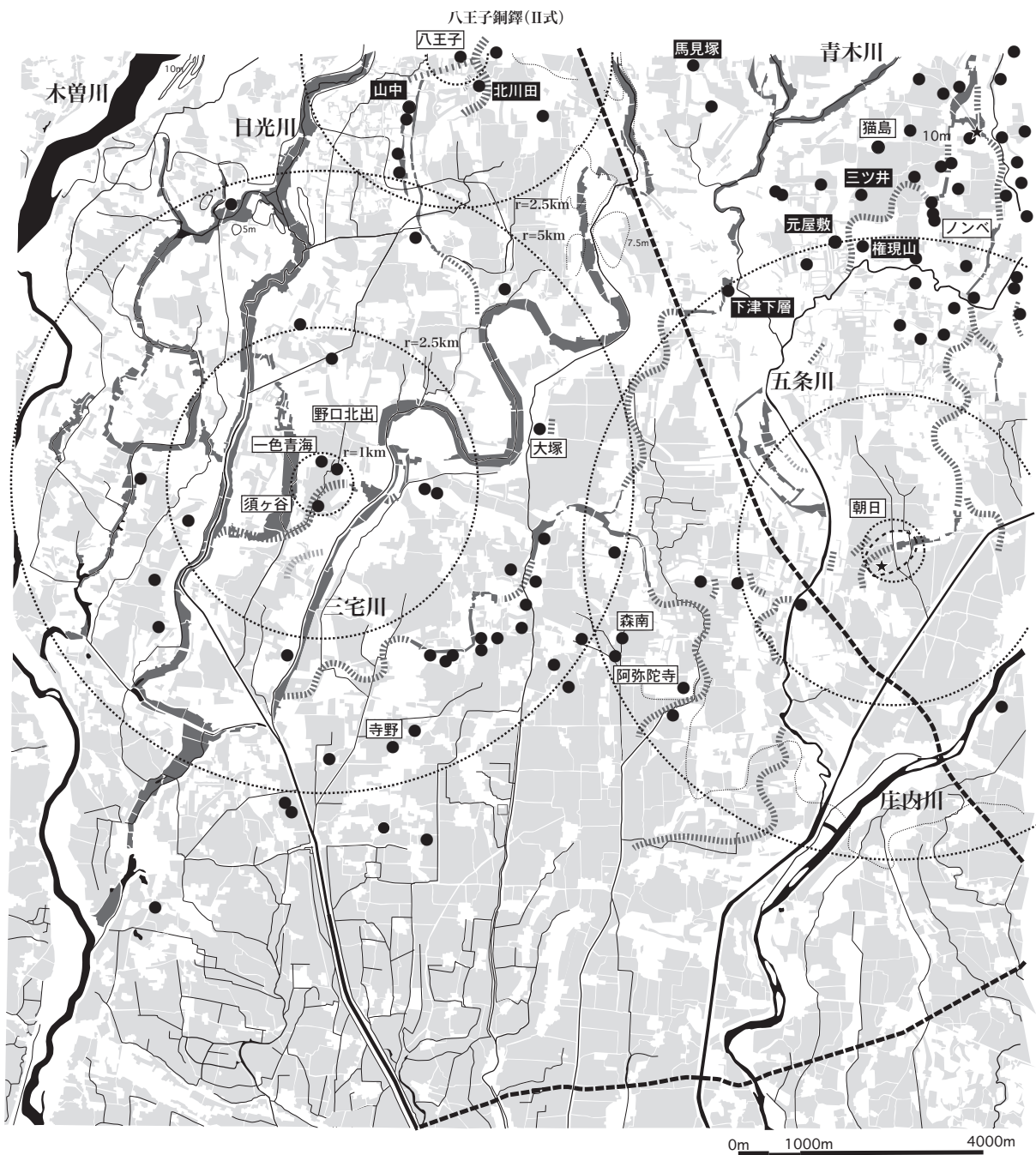


図 116 濃尾平野における地域区分

神平式の古い段階と考えられてきた。ところが、今回1例のみだが口縁端部を無紋のまま粘土を付加して突起を作った二枚貝条痕の甕が出土した。突起が中期の指摘みによる口縁端部圧痕に変わると考えれば組列が滑らかになるので、わたしはそれを須ヶ谷形甕の祖型（アーキタイプ）と考えた。指摘み手法は中期前葉には壺にも施され、二枚貝条痕紋系土器全体において器種を横断する共通した手法（モード）であるのみならず、朝日式の壺や甕、鉢（高杯）にも施され、まさに中期前葉のホライゾンになっている。

中期前葉の条痕紋系土器は岩滑式と総称されており、従来から知られていた甕にはいくつかの種類がある。体部の調整は、前期以来の縦位羽状条痕に斜条痕が加わり、口縁端部には押し引き、条痕、無紋があり、これらの要素が組み合って甕の諸型式が成立している。このうち、体部に縦位羽状条痕、口縁端部に押し引きを施す甕は岩滑式の規範的な形式となって広域に分布する。それに対して、口縁端部に条痕を施すものは体部の調整が縦位羽状条痕だけでなく斜条痕もあり、おもに濃尾平野南部から知多半島にかけて分布し、本稿では知多市細身遺跡を標式に細見形甕と呼ぶ。さらに中期前葉の新段階（朝日式2期並行）には犬山扇状地以北から美濃内陸部で櫛条痕手法（野笹類型）が分離し、木曽川中流域の岐阜県美濃加茂市野笹遺跡を標式に野笹形甕と呼ぶ。

これら条痕紋系甕とともに分布するのが、中期初頭（朝日式1a期並行）の金剛坂形甕a2類、その次期（朝日式1b期並行）の金剛坂系甕と朝日形甕である。朝日形甕は金剛坂系甕に斜条痕を加えるもので細見形甕に関係する。朝日形甕には尖った口縁端部に二枚貝で条痕を加えるというように、細身形甕との間をさらに埋める型式もあり、両者は近い関係にあることがわかる。

以上のように、中期前葉には多少の入れ替え

もあるが、金剛坂系甕、朝日形甕、岩滑式甕・細見形甕・須ヶ谷形甕、野笹形甕の系列が、相互に属性の一部を共有しつつ併存する状況が確認できる。

（3）甕の地域差と地域区分

甕の諸形式を報告書をもとにカウントしたのが表9である。さらにそれをレーダーチャートに表現した。遺跡差は明瞭であり、これらは濃尾平野内における甕の地域差を表しているという以上に、歴史的継続性を、つまり地域性を表現しているとみることができる。そして、これを基盤に弥生中期中葉における甕の諸型式が成立しているのである。該期の続条痕紋系甕は櫛条痕紋系を除き左上がりの斜条痕となる。

この斜条痕を基本属性にして、①朝日形甕は朝日遺跡を中心とする圏域に貝田町式の主要器種として分布する、②須ヶ谷形甕は須ヶ谷遺跡を中心とする圏域に貝田町式の主要器種として分布する、③細見形甕の後続形式は続条痕紋系土器の主要器種として濃尾平野東部から矢作川流域に分布する、の三者に、④縦位羽状条痕を残しつつ横位羽状条痕に移行する野笹形甕の後続形式は櫛条痕紋系土器の主要器種として濃尾平野北部から内陸部にかけて分布する、を付け加えることができる。

これらのうち、①は中期前葉以来の系列であり、③はハケメ調整を採用しないが、②の須ヶ谷形甕は条痕紋系土器からハケメ甕への変換を遂げており両者の中間に位置する。貝田町式に関わって重要なのは①②であり、これに伊勢湾西岸域が加わって地域区分が完成する。

（4）須ヶ谷遺跡と野口北出遺跡、あるいは新たな〈核〉

ところで、須ヶ谷遺跡を一つの核として捉える視点の可否について少し検討しよう。

今回の調査で須ヶ谷遺跡は、縄文晩期終末に始まり弥生中期前葉には濃密な居住の痕跡を残した

こと、しかし中期中葉には方形周溝墓群からなる墓域の形成が始まり、居住域が北に移動したことが判明した。そして、北に隣り合う野口北出遺跡も、弥生前期に居住が始まり、中期中葉には方形周溝墓群からなる墓域に移行し、かつ周溝の上層は洪水層で覆われる、というように同じ道筋を辿る。どちらも中期中葉の居住域の行方が問題になるが、少なくとも須ヶ谷遺跡では中期中葉後半へ続く居住域の縁辺が確認できており、廃絶する様子は全く無い。

つまり、野口北出遺跡を北端、須ヶ谷遺跡を南端と捉えるのであれば両端間は 0.8km 程となり、濃尾平野では大規模だが、朝日遺跡に比べればやや範囲が狭い程度で、遜色は無い。遺跡両端が居住域から墓域へ移行する点も、当初は 1km 圏の居住域が散漫に広がり、中期前葉後半に集住によって空いたエリアが墓域となった朝日遺跡とまさに同じプロセスを見せており、環濠の存在が確認できていないとはいえ、貝層や動物遺存体が出土する等の動態の共通性は質に関わる可能性もあり、重要な点である。これが《大規模集住集落》の変遷におけるキーポイントである。

現状では両遺跡間を旧三宅川本流が流れて弥生時代の遺跡が空白になっており、野口北出遺跡と須ヶ谷遺跡が一連なのかどうかは確証がないのだが、いずれにしても、濃尾平野における河川の流路が自然状態のまま長期に安定することはあり得ないから、将来的に両遺跡のつながりを示す資料が見つかる可能性は残っている。

独自の甕の形式を生み出した遺跡であることを出発点にして、多くの項目を追加しつつ、濃尾平野西部における 10km 圏の〈核〉として朝日遺跡に匹敵する大集落が姿を見せ始めたように、わたしには思われる。今後も注視していきたい。